Osaka University Knowledge Archive

Title	留学生大量受け入れ時代に向けた日本語教育システムの開発
Author(s)	西口, 光一
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学留学生センター研究論集. 2010, 14, p. 1-6
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50713
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

『大阪大学留学生センター研究論集　多文化社会と留学生交流』第14号（2010）

【特集　OUS カリキュラムの開発(1)】

留学生大量受け入れ時代に向けた日本語教育システムの開発

西口　光一*

要　旨

大阪大学留学生センターでは、留学生大量受け入れ時代に対応するために新たな日本語教育システムの開発に着手した。同システムの開発では、(1)渡日前の日本語学習支援と渡日後の日本語教育への円滑な接続、(2)共通基礎日本語教育のカリキュラムの確立、(3)目標と教育内容を明確にした有効な専門日本語科目の開発、(4)日本語学習と日本語教育を支えるコンピュータ上の支援プラットフォームの開発、(5)非漢字系学習者のための漢字教材の開発と漢字学習システムの整備、(6)漢字系学習者と非漢字系学習者の各々の特性に合わせた日本語教育の提供、(7)形成的評価と治療的な指導と学習のシステムの確立、などの達成が期待されている。

【キーワード】留学生大量受け入れ時代、日本語教育システム、IT の活用、支援プラットフォーム、共通基礎日本語教育

1　はじめに

留学生 30 万人計画の流れで、大阪大学はいわゆるグローバル 30 の 1 校に選ばれ[1]、留学生の受け入れを現在の 1,455 人（全学生数の約 6 %、2009 年 5 月現在）から、2020 年までに 3,000 人に増加させる計画をしている。3,000 人という数字は現在の留学生数の倍であり、本学に所属して日本語教育を受ける留学生の割合に変化がないとしてその推移を直接に反映するなら、今後 10 年間の間に提供授業科目を倍増しなければならないということになる。大学の財政に必ずしも余裕がない現在、日本語科目を 10 年で 2 倍に純増するというのは、非常に困難だと予測せざるを得ない。また、留学生に対する日本語教育のこうした量的変化の側面もさることながら、広い意味での質的な面の課題も認識されている。

こうした背景の下、大阪大学留学生センター日本語教育部門では、今後 4 年間を目途に、本センター独自の日本語教育システムの構築とそれを支える具体的なリソース（各種の教材の作成の他に、教材のウェブ配信、ウェブ上での学習機会の提供、履修登録・授業管理・成績登録などを行うＩＴシステムの開発も含む）の開発を行うこととした。大阪大学は研究型大学院大学であり、実際にも留学生の約 8 割を大学院留学生（研究生を含む）が占めているところから、新たに開発されるシステムとリソースは、本学に留学する大学院留学生と協定大学からの短期留学生[2]のための日本語教育と日本語学習支援を主眼としたものとなる。本稿では、構築される日本語教育システムと開発されるリソースを包括してＯＵシステムと呼ぶこととし、同システムの開発事業の概要を報告する。

2　ＯＵシステムのカリキュラム

開発予定のＯＵシステムの教育課程をＯＵＳカリキュラムと呼ぶ。本節では、同カリキュラムの概要を紹介

* 大阪大学留学生センター教授

する。

2-1　ＯＵＳカリキュラムとＣＥＦＲ

第二言語の教育と学習支援を合理的かつ有効に行うためには、第二言語の参照枠が必要である。第二言語の参照枠というのは、第二言語習得という行程の道筋を示してくれる地図のようなものである。参照枠を持つことで、学習者は現在自分が第二言語習得という行程のどの位置にいるのか知ることができ、教師はコースに入ってきた学習者が習得の行程のどの位置にあるかを評価することができ、カリキュラム開発者は開発中の教育課程がどの位置にいる学習者をどの位置まで連れて行こうするものかを示すことができ、また、教育課程がどのような趣旨でどのような内容のものとなっているかを説明することができるようになる。

周知のように、現在は、ヨーロッパ評議会のヨーロッパ共通参照枠、通称ＣＥＦＲ（Common European Framework of Reference for Language）が普及している。ＣＥＦＲはきわめて念入りに作成されており、現在世界中で活用されている。ＣＥＦＲと対応する形で作成されたさまざまな言語の教材も出版されている。目標言語の種類によって適宜に修正を加える必要はあるだろうが、ＣＥＦＲは第二言語の学習と教育と評価の有用なベンチマークを提供していると言ってよいだろう。ＯＵＳカリキュラムの開発にあたっては、国際的な通用性の観点から、ＣＥＦＲとの対応も考慮しながら、カリキュラムと教材を開発していく。

2-2　ＯＵＳカリキュラムで扱う教育内容

ＣＥＦＲとの対応でＯＵＳカリキュラムとして開発される教育領域を示すと下の図のようになる。

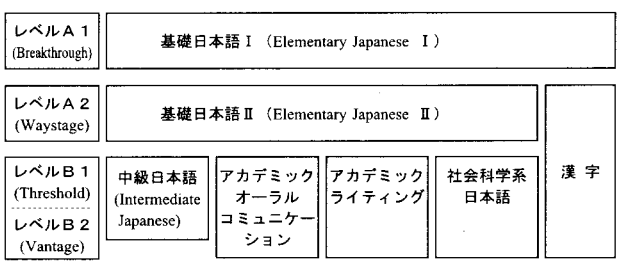

図１　ＯＵＳカリキュラムのコンポーネント

ＯＵＳカリキュラムでは、Ａ１とＡ２に対応する基礎日本語とＢ１に対応する中級日本語を合わせて共通基礎日本語と呼ぶ。共通基礎日本語の各レベルではＣＥＦＲの内容に準じた総合的な日本語教育が行われる。

ＯＵＳカリキュラムの基盤となる共通基礎日本語プログラムはそれに続く専門日本語の各科目に進むための基礎を養成する教育課程であり、専門日本語課程に進む留学生には基本的に同課程を修了していることあるいはそれに相当する日本語力を習得していることが要求されることとなる。大阪大学の日本語教育プログラムにおいては、レベルＡ１からレベルＢ１までの３レベルは各々、レベル100、レベル200、レベル300となる。

ＯＵＳカリキュラムでは、共通基礎日本語プログラムの上に、専門日本語のプログラムとして、特定の技能を養成したり、特定領域の日本語を習得したりするための課程を提供する。専門日本語の段階は、ＣＥＦＲのレベルＢ１からＢ２に至る段階となり、本学のプログラムではできるだけ早期にアカデミックな日本語の学習をスタートさせたいという趣旨から、中級日本語と同じレベル300から専門日本語教育を開始する。ＯＵＳカリキュラムでは、「アカデミックオーラルコミュニケーション」、「アカデミックライティング」、「社会科学系日本語」の３つの領域の研究と開発が計画されている。「アカデミックオーラルコミュニケーション」ではＣＥＦＲのレベルＢ２の「一般的な話し言葉のやり取り」と「公式の議論とミーティング」に対応するアカデミックな日本語力の養成を、そして「アカデミックライティング」では同じくレベルＢ２の「レポートやエッセイ」に対応するアカデミックな日本語力の養成をそれぞれ目標としている。「社会科学系日本語」は言うまでもなく特定領域の日本語教育となる。各専門日本語科目の開発計画については、本号掲載の三牧（2010）、村岡（2010）、西村（2010）でそれぞれ論じられている。

その他にＯＵシステムの開発では、漢字系学習者と非漢字系学習者の各々の特性に応じた漢字学習の標準を確立したいと考えている。同計画については、同じ

く本号掲載の西口（2010ｂ）で詳しく紹介している。

さらに、OUシステムの開発では、付属的なコンポーネントとしてカタカナ語の学習リソースを開発し、使用に供する予定である。カタカナ語の知識は、現代日本語を使用する若者として必須のものであるにもかかわらず、その学習支援方法については十分に研究されていない。カタカナ語は、OUＳカリキュラムの中の基礎日本語課程では現代日本語の一つの語彙領域として相応の事項は扱うが、体系的に扱うことはできない。開発されるカタカナ語学習リソースを活用することで、カタカナ語の知識を充実させると同時に、応用可能なカタカナ語能力を養成することを目論んでいる。カタカナ語学習リソースの開発については、本号掲載の竹内他（2010）論文で論じられている。

3　OUシステムの開発で達成が期待されている事項

本節では、OUシステムの開発において達成が期待されている事柄について述べる。

3-1 渡日前の日本語学習の支援と渡日後の日本語教育への接続

研究生あるいは大学院生としてまた短期留学生として大阪大学への留学が決まると、留学生の多くは、それまでの日本語学習経験の有無にかかわらず、多かれ少なかれ日本語学習への意欲を示す。それは、新規渡日の留学生の多くが、渡日前の数ヶ月の間に日本語教育や日本語の個人教授を受けたり、日本語を自学自習したりしていることからも分かる。結果的に、多くの学生は、日本語既習者として渡日し、その後、日本という第二言語環境で日本語の学習を継続することとなる。

これまで、大阪大学では、留学決定から渡日までの間の日本語学習については、積極的な組織的対応を行っていない。しかし、今後はOUシステムを活用して、この期間の日本語学習に積極的に関与し、この間の日本語学習を充実させるとともに、本学で提供されるカリキュラムの下での日本語学習に新規渡日留学生がスムーズに移行できるようにする予定である。つまり、OUシステムには、渡日前の日本語学習の改善に貢献するという機能を備えることが期待されている。

3-2　共通基礎日本語教育のカリキュラムの確立

これまで大阪大学では、入門から中級日本語までの教育のかなりの部分を種々の市販教材を活用して行ってきた。しかし、そうした教育の有効性そのものや本学学生の特質との整合性などの観点から新たなカリキュラムと教材の開発の必要性がカリキュラム担当者や授業担当教師の間で従来から認識されていた。そこで、OUシステム開発の中核として、留学生大量受け入れ時代に対応しうる大阪大学独自の共通基礎日本語のカリキュラムと教材及びＩＴを活用した教育・学習支援システムを総合的に開発することとした。

現在、入門から中級までの各段階で中核となる教材を順次開発中で、レベル100については今年度中に開発した教材を使用して、短期留学生を主な対象とする総合日本語の科目（週当り授業時間数は3コマ、本センターではＪＡ100と呼んでいる）を2010年4月から実施する予定である。レベル200とレベル300についても、新たに開発される教材を使用して総合日本語の各科目（ＪＡ200とＪＡ300）を2010年10月から実施する予定である。本誌では、西口（2010a）で、本年4月から使用予定のレベル100の教材とシラバスとカリキュラムについて報告している。

3-3 目標と教育内容を明確にした有効な専門日本語科目の開発

先に論じたように大阪大学留学生センターにおける日本語教育は大学院留学生（研究生を含む）を中心とした研究志向の留学生に向けて行われているところから、従来よりかれらの勉学・研究活動を支援するための日本語教育という趣旨の下に行われている。そのような趣旨は、これまでもいわゆる初級や中級段階の一般的な日本語教育の内容と方法にも反映されてはいたが、より直接的には専門日本語の諸科目に反映されていた。

しかしながら、これまで実践されてきた専門日本語

の教育は、個々の授業担当教師の経験と力量に依存してきた部分が多く、十分に共有可能な「財産」にはなっていない。

ＯＵシステムの開発においては、「アカデミックオーラルコミュニケーション」、「アカデミックライティング」、「社会科学系日本語」という３つの教育領域について、先行研究の調査と検討を包括的に行った上で、各々標準的な教材とシラバスとカリキュラムを開発する予定である。その際には、国際通用性の観点からＣＥＦＲをも参考にしながら各カリキュラムが説明されることになるだろう。

3-4 日本語学習と日本語教育を支える日本語教育プラットフォームの開発

ＩＴ技術の発達で同技術の教育への応用の可能性も多岐多様にわたるようになった。留学生センターでは、近い将来に生じる留学生を大量に受け入れる状況で、留学生に対する日本語教育と日本語学習支援を体系的に実施し、かつ効率的に運用するためには、ＩＴを活用することがきわめて有効であると判断した。期待される機能としては、(1)授業支援のためのＬＭＳ（Learning Management System）の機能、(2)日本語レベルや学習内容に応じた教材、学習システム、自律学習支援リソースなどの提供、(3)在学期間を通した学習記録の集積、の３つである。ＩＴ活用の方向性については、本誌掲載の難波・角南（2010）で詳しく論じている。

3-5 非漢字系学習者のための漢字教材の開発と漢字教育学習システムの整備

非漢字系学習者に対する漢字教育は、引き続き日本語教育における大きな課題となっている。その課題解決を困難にしている重要な要因の一つは、漢字を体系的に学習するということが漢字語彙の学習と密接に関連していることである。つまり、漢字を体系的に教えようとする試みは、しばしば学習者の限られた語彙知識によって阻まれるということである。漢字学習を困難にしているもう一つの重要な要因は、熟語の問題である。漢字を体系的に教えようとすると、しばしば当該漢字と未習漢字の組み合わせで成るさまざまな熟語に行き当たる。つまり、一つの漢字を体系的に教えようとすると、しばしば多数の未習漢字が連なってくるのである。

このような漢字指導に関わる２つの側面を考えると、語彙（漢字語彙）の知識と漢字の知識を巧みに連動させた漢字学習ロードマップを作成することが、効果的で実行可能な「体系的な」漢字教育を実現する第一歩であると考えられる。ＯＵシステムの開発においては、そのようなロードマップを作成し、それに基づいて非漢字系学習者のための漢字学習のシラバスと教材を作成した。また、同時に同教育についてコンピュータ上での学習システムも今年度中に開発した。ＯＵシステムにおける漢字の学習と教育の詳細については西口（2010ｂ）で詳しく論じている。

一方で、漢字系学習者のための漢字教育についてはすでに一定の教材とカリキュラムが開発され教育と学習支援が実施されている。上の教材と学習システムが完成すれば、個々の学習者の漢字習得適正と習得状況とに応じた適切な漢字教育と漢字学習支援を提供できる体制が整備される。

3-6 漢字系学習者と非漢字系学習者の各々の特性に合わせた日本語教育

日本国内で行われる日本語教育の場合、学習者集団の中に漢字系学習者と非漢字系学習者が混在するのが一般的に常態となっている。母語において漢字に慣れ親しんでいる漢字系学習者と、母語ではアルファベット等の表音文字を使用し漢字に全く馴染みがない非漢字系学習者とでは、日本語学習にあたっての学習者特性が大きく異なることは自明のことである。つまり、漢字系学習者の方が有利なのである。そして、漢字が表意文字でありかつ音読みにおいてはしばしば字音に共通性があること、及び漢字の字形が特異でかつ非常に複雑なため馴染みのない者には学習が非常に困難なことを考えると、その有利さは圧倒的であると見なさざるを得ない。にもかかわらず、これまでの日本語教育では漢字系学習者と非漢字系学習者を同じカリキュラムの下で同じ教材を用いて教育をしてきた。教育が

両種の学習者共に参加できるようにデザインされ実行されているとすれば、その教育が非漢字系学習者には負担が大きいものとなり、その一方で漢字系学習者には有利な特性を生かした「加速的な」教育になっていないことは容易に想像されるし、実際にそのような状況になっている。

ＯＵシステムでは、漢字系学習者にはその有利な学習者特性を生かした加速的な教育・学習の機会を提供し、非漢字系学習者にはその学習者特性に配慮した着実に日本語習得を進めることができるプログラムを提供する計画である。ＯＵシステムでは、両種の学習者を截然と二分するということではなく、学習者特性に合わせてカリキュラムのコンポーネントや自学自習を中心とするコンポーネントを組み合わせて両種の学習者各々に対応した２種類の日本語学習ロードマップを作成する予定である。そして、教育の実施に当たっては、それを参考にして各学習者が自らの個別的な学習者特性や既習日本語力等に合わせて適切な日本語科目が受講できるように指導する予定である。

3-7　形成的評価と治療的な指導と学習

ＯＵシステムの開発では、カリキュラムとそのコンポーネントを開発する一方で、評価システムも順次開発していく予定である。評価システムの開発では、総括的評価やプロフィシェンシーの評定ではなくむしろ形成的評価を中心に開発を行う。その趣旨は、さまざまな習得段階にある学習者の日本語習得上の課題を診断し、適切な治療的な指導や学習を提供することにある。

本事項についてはまだ研究途上であり具体的な方法についての青写真を提示できるまでには至っていない。しかし、現在のところは、カリキュラムの各コンポーネントの教材を開発する場合に、そのコンポーネント全体の学習目標やその中の各部分の学習目標を明確にしておくことで、形成的な評価活動を体系的に行えるように備えている。

4　おわりに

大阪大学留学生センターでは、ＯＵシステムの開発を科学研究費補助金に基づく研究開発活動の一部として位置づけている。すなわち、教材やカリキュラムの開発及び日本語教育を運営するためのＩＴプラットフォームの開発のために必要な調査・研究を行い、実際の教材やシステムを開発して教育を実施し、その効果を検証するという研究開発の一連のサイクルを日本語教育部門教員全員が共同して実行する予定である。そして、本稿及び本稿に続く各論文を第一歩として、順次に研究開発活動の進捗状況と成果を報告していく予定である。

付記

本研究は平成21年度科学研究費補助金基盤研究(B)「留学生大量受け入れ時代に向けた大学における新たな日本語教育スタンダードの構築」(課題番号21320093研究代表者西口光一）の助成を受けて行った。

注

1. 平成21年度の文部科学省の国際化拠点整備事業が始まり、国立大学法人と私立大学を合わせて13校が拠点大学として選ばれた。選ばれた大学は5年間にわたって英語による学部や大学院プログラムの整備を初めとして大学の国際化を推進する各種の取り組みを行う。同事業のウェブサイトは、http://www.jsps.go.jp/j-kokusaika/index.html である。
2. 短期留学生は3年次生と4年次生が多い。また、大阪大学が研究型大学院大学であるところから、協定大学も同様のタイプの大学となっている。こうした事情から、短期留学生も一般的に研究志向や大学院進学志向が強くなっている。そうした特徴から、本学への大学院留学生と同じような性質の日本語教育を提供することが可能であり、またそれが適切であると判断される。

参考文献

Council of Europe (2001) *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment.* Cambridge University Press. 吉島茂他訳・編『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社

三牧陽子（2010）「研究場面における対面コミュニケーション能力養成に向けて―『参入する研究コミュニティを知る』アクティビティ―」『多文化社会と留学生交流』第 14 号,pp.41-48

村岡貴子（2010）「専門日本語ライティング能力の養成を目ざす学習課題の捉え方」『多文化社会と留学生交流』第 14 号,pp.49-56

難波康治・角南北斗（2010）「大学の日本語教育における IT の利用と日本語支援 IT プラットフォーム開発」『多文化社会と留学生交流』第 14 号,pp.63-69

西口光一（2010a）「自己表現活動中心の基礎日本語教育－カリキュラム、教材、授業－」『多文化社会と留学生交流』第 14 号,pp.7-20

西口光一（2010b）「漢字学習ロードマップと漢字マスタリー学習システムの開発」『多文化社会と留学生交流』第 14 号,pp.21-31

西村謙一（2010）「中級社会科学日本語読解教材の開発」『多文化社会と留学生交流』第 14 号, pp.57-62

竹内茜・大平幸・大谷晋也（2010）「ウェブを用いた日本語の音韻とカタカナ語（外来語）習得システムの開発」『多文化社会と留学生交流』第 14 号, pp.33-40

Van Ek, J. A., Alexander, L. G. and Fitzpatrick, M. A. (1980) *Waystage English.* Pergamon Press.

Van Ek, J. A. and Alexander, L. G. (1980) *Threshold Level English.* Pergamon Press.